8 月 8 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　20：　17 – 35

「あなたがたを委ねます」

日本では８月を特に平和を覚える時として過ごしています。今日を挟む８月６日は広島の、８月９日は長崎の原爆記念日です。一瞬にして日常が崩壊することを私たちは知っています。平和を保ち、安全に、安心して生きることの困難さを歴史は教えているのです。一時、保たれた平和は力によって蹂躙され、再び涙が世界を覆います。平和のプロセス(過程)を懸命に歩んでいても、私たちの思いとは関係なく、その終わりは突然やってきます。そして、困難の中に放り出されるのです。

主の平和を告げ知らせる者の道も絶えず困難が待ち受けています。それは、狼の群れに投げ込まれた羊のようだと比喩されます(「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」マタイによる福音書 10:16)。神の知恵は十分であり、神の言葉に従い続けることによって、苦難を乗り切ることができるはずです。しかし、その道は厳しく、苦しいものです。自分が正しいのかわからなくなり、神以外のものに助けを求めようとすることさえ起こり得ます(「また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。」使徒言行録 20:30)。

しかし、どのような状況にあろうとも、主は決して見捨てない。その約束だけが困難と立ち向かう唯一の武器となります。だからこそ、心を確かに神に向け続けることが大切です(「わたしは心を確かにします。神よ、わたしは心を確かにして／あなたに賛美の歌をうたいます。」詩編 57:8)。常に神を見上げ、神を賛美し続けることが大切です(「主に向かって歌い、主を賛美せよ。主は貧しい人の魂を／悪事を謀る者の手から助け出される。」エレミヤ書 20:13)。何より、神の言葉こそが私たちの助けであり、平和の源なのです。

パウロはミレトスからエルサレムに向けて出発するに当たって、エフェソから長老たちを呼び、最後の言葉を遺しました。パウロは、自分の歩いてきた道を振り返り、そしてこれから進む道について、困難が待ち受けていることは間違いないけれど、その道を走り抜くことを固い決意を持って語ります(「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」使徒言行録 20:24)。そして、パウロが伝えた神の言葉に生き続けるようにと諭します(「だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。」使徒言行録 20:31)。

「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」(使徒言行録 20:32)。

この言葉は決別の言葉であると同時に、パウロと離れて歩み始めるエフェソの長老たちに対するはなむけの言葉です。「あなたたちならできる。大丈夫だ」と。同時にこれは、現代に生きる私たちへの励ましの言葉でもあります(「この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」使徒言行録 20:32)。全てを神に委ねて、神の言葉に聞き続けて参りましょう。